

正しく評価する

平成 29 年 1 月

立川女子高等学校

カウンセラーだより裏面



先日、あるお医者さんにお会いして、仕事のことで色々ご指導を頂きました。とても素晴らしいお話でしたが、その中でも一番感動したのは「子どもを正しく評価する」というお話でした。しばらく前から「子どもはほめて育てましょう」ということが、あちこちで言われています。逆に「ほめて育てた子どもはわがままだから、ほめて育てるのはよくない」という意見もあって、どっちの意見もたくさんの方に書かれていたりします。

ほめて育てるべきなのか、厳しくすべきなのか…。そのお医者さんは、「ほめるべき時にはほめ、叱るべき時にはしかって育てる」と教えてくださいました。ほめるか叱るかではなくて、その人の行動を正しく評価することが大事だということです。

例えば、テストで高い点数をとったので、親にほめてもらおうと報告したら、「珍しい。明日はきっとヤリが降るぞ」などと言われることがよくあります。きっと親御さんは、子どもをほめるのが照れくさかったのだと思いますが、言われた子どもは大きく傷つきます。

また子どもを強い人間にしたいと思っているお父さんが、子どもの至らない部分を厳しく叱ることが正しいと考えて、そうしていました。ところが子どもは「僕は父に嫌われている」と心の底から信じて育ちました。そして高校生になったある日、自殺を企てました。幸いにしてその子の命は助かりましたが、意識が戻ってすぐに言った言葉は「お父さん、死ねなくてごめんなさい」という言葉でした。

逆に、子どもを叱らないことに決めた方が、結局は子どもをととてもわがままな大人にしてしまったという話も珍しくありません。年老いても尚、我が子のわがままを聞いているうちに、我が子が横暴になり、親御さんに手をあげるようになったという話も珍しくありません。

これらはすべて、子どもの行動が正しく評価されなかったことが原因かもしれません。テストで高い点を取った時は、正しく評価してもらおう、つまりほめてもらうべきです。逆に悪いことをした時には、きちんと叱られるべきです。「ほめて育てましょう」と言われると、何となく「叱ってはいけない」と言われたように感じるし、「厳しく育てた方がいい」と聞くと「ほめる必要はない」と思うてしまうことが多いですが、それは私たちの錯覚かもしれません。

「正しく評価する」ことは、実は当たり前のことなのですが、実はとても難しいことかもしれません。特に日本人はほめることが苦手だと言われています。それでも相手を「正しく評価」しないと、時に相手を傷つけることになりかねません。そうならないように、相手をきちんと見て、正しく評価したいですね。

